
魔法少女リリカルなのはA's～不屈の心と鋼の後継～

三好八人衆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA・S 不屈の心と鋼の後継

【Nコード】

N7018S

【作者名】

三好八人衆

【あらすじ】

P T事件から数月の時が経ち、高町なのはと異世界からの旅人であるキラランシェロは平穏な日常を取り戻していた。しかし、その平穏は再び破られることになる。

呪われし書の封印が解かれるとき、新たな戦いの幕が開ける！

※作者は原作知識無しです。この作品は『魔法少女リリカルなのは 不屈の心と鋼の後継』の続編です。

簡単な主人公紹介等

キリランシエロ

キエサルヒマ大陸出身の15才の少年。両親は生後すぐに亡くなり、孤児となった。両親が魔術士であったため、大陸黒魔術の最高峰『牙の塔』で学び、大陸最強の黒魔術士であるチャイルドマン・パウダー・フィールド教師に主に師事。魔術士の間では師の後継者と目され『鋼の後継』の二つ名で呼ばれる。サクセサー・オブ・レザージェンチャイルドマン教師やその前に師事したウォール・カーレン教師から暗殺者としての訓練を受け、チャイルドマン教師をして『殺せないものはない』と言われるが、『人を殺すことができない』という矛盾を抱えている。家名は『フインランディ』だが、キエサルヒマ大陸では不動産を持つ者だけが家名を名乗れるため、フルネームは「『牙の塔』のキリランシエロ」となる。

王都で十三使徒の選考を受ける直前、『塔』から派遣されたハイドラントことミラン・トラムの挑発に激怒し、彼を半殺しにしてしまったことで問題視されてしまい、選考を受けることができなかった。任務で天人種族の遺跡を探索中に、偶然魔術文字の陣を起動させてしまい地球の海鳴市にやってきて、魔法使いとしての目覚めた居候先の高町家の次女・なのはの魔法使いの師匠として彼女に協力し、PT事件解決に尽力する。普段は高町家が経営する喫茶店『翠屋』でアルバイトをしている。

血は繋がらないが、レティシャとアザリーという2人の姉がいる（彼女たちは従姉妹の関係である）。

アザリー

キリランシエロの姉。魔術士の街であるタフレム市の名士であったケットシー一族の出身であり、レティシャとは従姉妹の関係。ケットシー一族が一晩で謎の崩壊を遂げた後は、一族のうち2人だけが

残された。本名はアザリー・ケットシー。

牙の塔でチャイルドマン教師に師事し、『天人種族の遺産の使い方とその在り処』と『ウィルドグラフと沈黙魔術の知識』を学んだ。同時に白魔術士でもあり、高い実力を有した。原作の最後で最後の決断を下すオーフエンに助力するために消滅した・・・が、今作では原作とは平行世界であるキエサルヒマ大陸に転生し、行方不明になったキラランシェロを探すために地球の海鳴市にやってきた。

プロローグ（上）

『牙の塔』で恐ろしい人物はいったい誰か？その問いに、10人中10人がこの人物の名を答えるだろう。

『天魔の魔女』アザリー。弱冠20歳の彼女を『塔』の上層部から見習いまでが恐れる理由——それは魔術士としての実力が優れている事はもちろんあるが、彼女は黒魔術士でありながら白魔術士であるという奇異な存在であった。

熱と力を司る黒魔術に対し、白魔術は時間と精神を司る。つまり過去にさかのぼったり、他人を操ったりする事ができるのだ。それ故か、白魔術士達は貴族連盟が所有する『霧の滝』なる要塞に幽閉されている。

『塔』の廊下を歩くアザリーは、憂鬱な気分で目的の部屋へと歩みを進めていた。

（キリランシエロが連絡を断ってもう1週間・・・ティッシは引き籠っちゃってるし、みんななんか暗いのよね・・・コルゴンはいつも通りいないけど）

しかし、姉として連絡を断った弟が心配でないわけがない。そんな中で、師であるチャイルドマンに旅装を纏め、戦闘服で来るように言われた時には淡い期待があった。

（先生が多分、何かの情報を掴んだってことでしょうね・・・）

チャイルドマン教師のみならず、教師の控室は常に薄暗い。昼間でも明かりを灯さなければならぬその部屋で、アザリーは椅子に腰

かける師を呆然と見下ろしていた。

「異世界・・・ですか？」

「うむ。私の入手した情報によると、キリランシェロは遺跡内にあった天人種族の転移魔術文字の陣の作動に巻き込まれてこことは違う世界に渡った可能性が高い事が分かった」

チャイルドマン・パウダーフィールド教師は、アザリーが本来いた世界となんら変わらない鉄面皮ぶりで言葉を続けた。

「その世界の名は『地球』。そのなかの『日本』なる国に設定されていたようだ。そこでアザリー、君にはその地に向かってもらい、彼の生存確認、及び必要があれば救援を任せたい」

彼はさらに机の引き出しからいくつかの書類束と財布、何枚かのカードを取り出した。

「これから向かってもらう『日本』の基本的な情報と、金銭が入った財布、そして銀行に口座をすでに作ってあるから、引き落とすためのキャッシュカード。クレジットカードに保険証だ。費用はすべて経費で落ちるそうだ」

「随分と至れり尽くせりですね」

「なにせ『塔』始まって以来の事態だ。どうやって異世界の戸籍を手に入れたかは知らんが、我々が永久に知る事はあるまい」

そして最後に、チャイルドマンは小さな丸いコンパクトを取り出して机に置いた。

「これは？」

開いて見ると、上の蓋にはガラスがあり、下には小さな魔術文字の陣が刻まれていた。

「異世界との間でもつながる携帯通信装置だ。これで定時報告をしてくれたまえ」

「これで、罪滅ぼしにでもなったか？」

アザリーが装備を持って退出した後、チャイルドマンはひとり呟いた。

「いや・・・なるまいな。私のせいで、あの2人は・・・いや、私の生徒全員が、人生を狂わせてしまったのだからな」

チャイルドマンは立ち上がり、ある場所に向かって歩きはじめた。

「念の為・・・『あれ』をエキントラに預けよう。アザリーが間違っても手を出さぬように」

プロローグ（下）

「相変わらずの、静かな朝やなあ」

海鳴市に住む少女・八神^{やがみ}はやての一日は、いつも静かに始まる。両親と早くに死別し、一人で暮らす彼女を起こす者はいない。

「よいしょっと・・・朝ご飯でも作ろうか」

ベッドから身を起こし、脇に置いてある車椅子の手すりに手を伸ばす。原因不明の病気で足が不自由な彼女は、車椅子に乗って日常生活を過ごす。

車椅子に座り、いつものように扉を開けてリビングに行くいつもの日常。しかし、彼女の日常は今日をもって終わりを迎える――

「・・・私は、夢でもみとるんやろか・・・？」

リビングについた彼女を待っていたのは、いつもの風景――に加えて、ソファ―に寝そべる見慣れない女性の姿だった。

年齢は恐らく20才くらい。黒い癖っ毛のある髪の毛が特徴の美女で、彼女の身を包むのは黒いピッチリとした皮の服。足元には旅行かばんが置いてあった。

ムニー、と自らの頬を摘まんでみる・・・痛い。夢ではないようだ。

「夢ではないわよ、お嬢ちゃん」

「びっ!？」

いつの間にか目を覚ましていた女性に、はやてはびっくりして飛びあがる。ブラウンの瞳に、どこことなく猫を連想するその女性は、はやてにとって珍妙な質問を大真面目な様子でしてきた。

「ところでここは『地球』の『日本』で間違いないかしら？」

「そうなんですか・・・弟さんを探しに来たんですね」

「ええ。なぜここで寝ていたのかはわからないけれど・・・けどあなた、よく私の事を信じたわね？」

アザリーと名乗った女性の話は、はやてにとっておとぎ話並みの信憑性の内容だった。しかし自分は異世界から来たと言うこの女性の言う事を、はやては何となく信じることにした。

「だって、アザリーさん悪い人には見えへんもん」

はやてのその一言に、アザリーは溜息をついた。

「・・・あなたの警戒心のなさは、年長の人間として心配ね。ところであなた、ご両親は？」

アザリーにとっては、何気ない一言だった。しかし、その一言にはやては努めて明るく笑った。

「私はお父さんもお母さんもおらへんねん」

「・・・そう。悪い事を聞いたわね」

アザリーも両親はいない。実のところ、死別したかもわからない。ある日突然、彼女と従姉のレティシヤを残して一族が蒸発してしまったのだ。

「ねえ、アザリーさん。これからしばらくここにいるん？」

「そうね・・・特にアテがあるわけでもないし、この街から探してみようかなとは思っているわ」

その答えに、はやては身を乗り出して続けた。

「そ、そしたら・・・よかったら、うちで暮らさへんか!？」

「この家で?・・・そうね、宿泊施設に泊まる事も考えたけど、ここに飛ばされたのも何かの縁だし、お邪魔しようかしら」

「やったー！」

諸手をあげて喜ぶはやての姿に、アザリーは微笑みを浮かべた。
(ま・・・こんな旅もいいかもね)

はやての部屋には、一冊の書が鎮座している。鎖が巻きつけてあり、読む事が出来ない不思議な本。

この本が海鳴の町に新たな嵐を招き、一人の少女の運命を未だに弄んでいるとは、誰も予想し得なかった・・・

第1話〈迫りくる運命〉

海鳴市には、地元でも評判の喫茶店がある。その店の名は『翠屋』。最近その店に、ある少年がアルバイトとして働きはじめた。この少年の名をキリランシェロという。

異世界からやってきた彼は、人知れず海鳴の町に起こった2人の魔法少女による『ジュエルシード』争奪戦に関わり、解決に導いた。2人の少女は友情を結び、再会を約束して別れ・・・しばらくの時間が流れた。そして一方の少女・『高町なのは』は魔法で人助けをしたいという夢の実現のため、日々訓練を重ねていた・・・

「じゃあ今日の訓練を終わります」

「ありがとうございます・・・」

夜の海鳴市の公園。結界を張ったフィールドで、少し焦げたなのははキリランシェロに頭を下げていつもの戦闘訓練は終わった。

《マスター、今日も負けてしまいましたね》

「うん・・・キリランシェロ君は相変わらず容赦がないの」

疲れた様子で自分の隣を歩く少女の頭を、ポンポンと撫でる。

「手を抜いたら怒るくせに」

「だって、『全力全開』が私のモットーだもん！」

キリランシェロに一度も勝った事がないのはだが、キリランシェロは彼女に確かな成長を感じていた。

（以前に比べて攻撃に迷いがなくなったし、空間転移からの奇襲も防げるようになった・・・さらに自分の苦手分野の接近戦にも持ち

込ませないようにしている)

彼女の頭を撫でながら、キリランシェロは溜息をつく。

(もっとも、この成長が無駄に終わればそれに越した事はないんだけど)

つまり、この街に・・・彼女自身が、魔法を使わせなければならぬ事態が起こらない事。それが、キリランシェロが切に願う事だった。

「高町さん、郵便です」

「はい！」

郵便局員から小包を受け取ったのはは、その差出人の名を確認して笑顔を浮かべる。

「わ、フェイトちゃんからの！」

小包は、ほぼ週に1度のペースで送られてくるフェイトからのビデオレターだった。さっそく観てみると、前回と変わらず元気そうな姿を画面の向こうから見せてくれた。

内容は自分もアルフも元気でいることと、クロノ達も元気であること。そして裁判が終わり、ハラオウン家の保護観察を受けながら管理局の魔導師として働くことになりそうだという事・・・そして近々、海鳴の町に行く事だった。

『あ、あと・・・なのはの学校に、私も行く事になったんだ』

「えー！やったあ！」

フェイトの報告に、なのはは諸手を挙げて喜ぶ。新しい友達ができた事が嬉しいし、フェイトをアリサやすずかに紹介できる事が嬉しかった。

「そう、明日ははやての誕生日なの・・・」

「うん。いつもひとりやったけど、今回はアザリーお姉さんがいてくれるんや！腕によりをかけてご飯作るで♪」

近所のスーパーの店内で、夕飯の食材を探しながらアザリーははやての誕生日がいつなのかを知った。

「本当なら、私を作るべきなんだけど・・・」

「お姉さん、料理下手やからな。ご飯炊くの失敗する人初めて見たわ」

「ううっ、面目ないです・・・ていうか、思い出させないで・・・」
普段料理をしないせいか、アザリーは極限の料理音痴だ。

（ティッシュくらい料理ができればいいんだろうけど・・・）

「じゃ、お姉さんには私が料理を教授してしんぜよう」

「はは」

微笑ましい会話をする2人――しかし、八神はやてが呪われし書の命運に巻き込まれるまで、そう時間は残っていなかった・・・

第2話く怪しさ爆発だったのでく

月が空に昇り、夜の帳が下りた頃——八神家の明かりも消え、アザリーは寝間着姿のはやてとともに眠りに就こうとしていた。

はやての部屋のベッドで眠ったはやてを懷に抱き、横になるアザリー。明日誕生日だという彼女に頼まれて、一緒に眠ることにしたのだ。はやてはすぐに眠りについたが、なぜか彼女は眠る事が出来ずにいた。

（何か胸騒ぎがするわね・・・）

なにせ女2人——そのうち一人はまだ小学生だ。窃盗犯がこの家を狙わないとも限らない。はやてが寝付いたのを確認してアザリーはスツとベッドを抜け出し——

「んう・・・」

「・・・これじゃあ、動けないか」

寝間着の裾をはやてがしっかりと握り、アザリーを放さない。彼女の表情にはむずかる様な、泣き出しそうな表情が浮かんでいた。

（まあ、泥棒くらい素手でも撃退できるし・・・）

再びベッドに戻り、はやてを抱きなおす。すると、泣き出しそうだった少女は安堵したような笑みを浮かべた。

すると——

暗闇に染まっていた部屋に、突如として光が発生した。

「な、なににに!？」

「落ち着きなさい、はやて!」

光の発生源ははやてが気にしていた鎖で封じられた本。光の強さの為か、はやては目を覚まして怯えたようにアザリーのパジャマの裾を握りしめる。アザリーははやてを庇うように抱きしめ、魔術の構成を編み上げる。

さらには魔法陣が浮かび上がり、間において4人の人物の姿が浮かび上がった。

桃色の髪をポニーテールにした長身の女に燃えるような赤い髪を三つ編みにした小柄な少女、金髪に緑色の服を纏ったアザリーと同年くらいの女に銀髪の屈強な男が魔法陣とともに姿を現したのである。

「はやて、少し家を壊すわよ」

「へ？」

先手必勝。アザリーは家主の返事を待たず、魔法陣に向かって手をかざし、叫んだ。

「光よ！」

熱衝撃波が四人に向かって撃ちこまれ、爆音をあげる。アザリーは反応を確かめることなくはやてを抱え上げると、窓を蹴破って道路に転がり落ちた。

「な・・・なんなんこれ・・・」

「ああ、部屋なら直せるから。問題ないでしょ？」

「そうかい、部屋は直るんか。なら問題・・・あるわっ！」
ビシッとアザリーの胸にツツコミを入れるはやて。

「なんでいきなり攻撃したん！？しかもなんかお姉さんが叫んだら爆発したで！？」

はやての叫びにアザリーは「あれ？」とでも言いたげに少女を見下ろして口を開いた。

「私が魔術士だって、言った事なかったかしら？」

「言ってへんよ！お姉さんが異世界から来て、弟さんを探しに来たって事しか聞いてへん！そ、それと、なんであの人たちをいきなり攻撃したん！？あれじゃ・・・」

「だってあの連中怪しさ爆発じゃない？それに——」

アザリーは家に向き直り、再び手をかざして叫んだ。

「壁よ！」

魔術の障壁が展開された直後、桃色の髪の毛の女の剣が障壁に叩きこまれた。それをみて、アザリーははやてに笑いかける。

「ね、無事だったでしょ？」

「・・・なんかむっちゃ焦げてるし、あの人めっちゃ怒ってるみたいやけど・・・」

短い時間の間に、アザリーという女性の事を知る事ができたはやてだった。それはもうめいっぱい。

こうして——

ヴォルケンリッター

『夜天の主』八神はやてと守護騎士達は、ちよつと焦げ臭い対面を果たしたのだった。

第3話く蒐集く

『闇の書』から現れた『烈火の騎士』シグナム、『鉄槌の騎士』ヴィータ、『泉の騎士』シャマル、『盾の騎士』ザフィーラの主となつた9才の少女・八神はやては、彼らと居候の前で宣言した。

「それじゃあ私は、みんなの衣食住を世話することになるわけやね」
『・・・・・・・・・・は？』

「治れ」

自らが破壊した壁に向けて手をかざして呟くと、時間がさかのぼつた様に穴が見る見るうちに塞がっていった。それをアザリーの傍らで見ていた赤毛の少女――ヴィータは感心したように叫んだ。

「す、すっげー！完璧に治っちまった！」

「フフン、ざっとこんなもんよ」

（ま、けっこう疲れるんだけどね・・・）

守護騎士達が現れた日の朝。八神家は朝から新たに家族となったシグナム達と大掃除行っていた。

アザリーの担当は夜に自分が熱衝撃波で開けた穴の修復。魔術で修復可能な事を知った家主から修復するよう命じられたのだ。修理すること自体は少し疲れるだけなのだが、目を輝かせたお子様騎士^{ヴィータ}がカルガモの子のようにくつついて来て少々煩わしい・・・が、悪い気分ではない。

（妹って、欲しかったのよね♪朴念仁で鈍感の弟とは違ってヴィータもはやても可愛いし・・・）

なかなか異世界ライフを楽しんでいる天魔の魔女であった。

しかし、その楽しい生活は唐突に終わりを迎えた。以前から原因不明の病気で足を患っていたはやての病状が悪化し、病院に運ばれたのである。幸い入院は数日で済み、帰宅を許可されたのだが・・・はやてが倒れてから、守護騎士達がこそそと怪しい動きを見せている事をアザリーは気が付いていた。

「ふう・・・今日はあまり稼げなかったか」

月が頂点から降りはじめた頃、八神家の玄関に転移の魔法陣が展開されて4人の守護騎士が姿を現した。

「アザリーとはやてはもう寝てんのか？」

「ああ、出かける前に確認した。主はやてもアザリーも床についていたから、問題はないだろう」

「じゃあ私達も部屋に戻りましょう」

守護騎士達が声を潜めて会話し、自室に戻ろうとリビングの扉を開けた時、待ち受けていたのは椅子に座り、足を組んだ状態で待っていたアザリーだった。固まる四人に対して彼女はにこやかに話しかけた。

「おかえり、随分と遅かったじゃない？」
口調は穏やかだったが、そのブラウンの瞳は『話さないとどうなるかわかっているでしょうね』と雄弁に語っていた。

観念した4人を代表して、シャマルがアザリーに説明した。
はやての足の病気の原因は『闇の書』であり、このままでは確実に彼女は死に至る事。

それを阻止するためには魔導師の魔法の源であるリンカーコアを蒐集し、闇の書を完成させなければならない。

しかしはやては闇の書について理解したうえでシグナム達による蒐集活動を望まず、彼女らと活動を行わないよう約束していたが、はやてが倒れた日から蒐集を始め、異世界で魔導師や魔法生物を襲撃している——といった事を話した。

「そう・・・」

一言つぶやき、アザリーは瞳を閉じて黙りこんだ。しばらくの沈黙が続き、4人が居心地が悪くなってきた頃に彼女は口を開いた。

「それなら私がやる事は一つね・・・」

アザリーは立ち上がり、4人に対して宣言した。

「私もその蒐集、参加させてもらわよ。反論は聞かないのでそのつもりで」

（我ながら、変わったものね・・・）

自分の宣言に呆然とする4人に背を向けて、さっさと自室に戻ったアザリーは先ほどの自身の発言に自嘲した。

（それほど、あの子とこの家を気に入ったということかしら）

『天魔の魔女』アザリーが他人のために動く。それも自分の好奇心の為ではなく、たった先日知り合った少女の為に――こんな事を常に恋路を邪魔されている赤毛の少年が知ったらどんな反応をするだろうか。

（・・・帰ったらハーティアを締めておこう）

第4話く再会（上）

キリランシェロの日課は、毎朝のランニングである。なのはの登校前の軽い戦闘訓練を終えて朝食を摂った後、いつもの公園のランニングコースを走るのだ。いつものようにランニングを終えてスポーツドリンクを飲んでいると、背後から久しぶりに感じる気配が。振り向くと、そこには数か月前に知り合った魔導師の少年の姿があった。

「久しぶりだな、キリランシェロ」

「クロノか」

時空管理局執務官クロノ・ハラオウンは、汗を拭うこちらに向けて片手を挙げて挨拶した。

「魔導師襲撃事件？」

「ああ、最近様々な世界で魔導師や魔法生物が何者かに襲撃されてリンカーコアを抜き取られる事件が頻繁に起きているんだ」

久しぶりに会った執務官の少年は、なにやら新しい事件を追っているらしく少し疲れた様子を見せていた。

「今日ここに来たのは、なのはか君に注意を促しておこうと思ったのと・・・最近、このあたりで魔法が展開されたのが報告されてな、その調査に来たんだ」

「結果なら毎朝このあたりでなのはが展開してるけど・・・それ以外にも？」

「ああ、深夜にごく短時間だが魔法の展開が確認されたんだ。なのは深夜に魔法は使っていないだろう？」

その質問にキリランシェロは肯く。なのは朝の戦闘訓練に備える為、夜の10時前には眠る。

「まあ、調査はこれから始めるつもりだが・・・くれぐれも気を付けてくれよ」

遊ばれている。

腕利きの魔導師として様々な犯罪者や魔法生物と戦ってきたが、これほど絶望的で、屈辱的な戦いはあっただろうかと思ふ。

打つ手はすべて見越され、強力で素早く放たれる魔法に晒された彼は心身ともに疲れ切っていた。

「くそつたれ・・・なんだってんだ!？」

森の中を逃げまどう彼に、さらに『敵』の音が響く。

「光よ!」

「ぐおおっ!？」

熱を帯びた衝撃波が足元に直撃し、吹き飛ばされる。防御魔法を展開する暇も与えてくれない。聞こえてくるのは声のみだ。

(猫にいたぶられている鼠の気分だぜ・・・これで何度吹き飛ばされたんだ、俺は)

立ち上がって逃げ、しばらくすると声とともに放たれた衝撃波に吹き飛ばされる。そんな事を繰り返して――それはついに終わりを迎えた。

「なっ・・・」

彼の前にそびえたつ岩の壁。普段なら、浮いて飛び越えるこの壁が、魔力と体力が枯渴した彼にはあまりにも高い壁だった。そして、後ろから聞こえてきた僅かな着地音。振り向いて見れば、そこには襲撃者の姿があった。

「ヒュー・・・なかなかの美人じゃねえか」

「あら、当然の事をわざわざありがと」

黒皮の戦闘服に身を包んだ20才ほどの、ブラウンの瞳に黒の癖っ毛が特徴の女。どことなく猫を連想する彼女こそが、自分を襲撃し、そして最近噂になっている襲撃犯の一味である事を彼は確信した。

「ま、アンタにはさっさとおねんねして出すもん出してもらいたいのよね」

「やってみろ！オオオオオオオオ！」

彼は長年の相棒である剣型のデバイスを手に、雄叫びをあげて突撃。最後の力を振り絞って敵を斬らんとするが剣の軌跡から、踊るような仕草で逃げる女。

「あーあ、やだやだ・・・こんなおっさんの相手なんてさっさと終わらせるわよ」

うんざりしたような表情で逃げ続ける女の動きが変わった。剣が振り下ろされた一瞬の隙について男の懷に潜り込み、腹に手を当てる。「死んでもらっても構わないけど・・・あの子に血の付いた手で触りたくないから、殺さないで置いてあげるだけ感謝なさい」

ポツリと男に聞こえたか微妙な声で呟いた後、女は叫んだ。

「光よ！」

少しだけ気を失っていたらしい。自らがうつ伏せに倒れていた事に

気が付いた男は、耳に入ってくる声に意識を取り戻した。

「それで？これで何ページくらい埋まった？」

「うーん・・・2ページですね」

「ま、そんなところかしら？」

少しのんびりとした印象の女の声が聞こえる。仲間だろうか？

「ッ！」

胸に痛みを感じる。どうやらリンカーコアを抜き取られてしまったらしい。『殺しはしない』といていた通り、手加減はしてもらったらしい。

「あら・・・起きたのかしら？」

応える体力はない。ただ、自分を倒した者の顔を覚え、捜査の役に立てようと顔は上げた。

「あ、そうだ。忘れてたわ。あんたに私達の顔を忘れてもらわなきゃなんないから、またちよつと眠ってもらおうわね」

女は懷から手のひら大の黒い箱を取り出すと、その表面に指をなぞらせた。すると、箱は光を帯びはじめたではないか。それを女は男の頭に乗せ、呟く。

「忌わしき記憶は消え、汝は眩い明日を迎えるだろう」

その呟きを最後に、一瞬にして男の視界は黒一色に染まった。

『牙の塔』チャイルドマン教室では、大陸最強の魔術士であるチャイルドマン教師から7人の生徒がそれぞれ師の能力^{タレント}を別々に受け継いだ。そのなかで、アザリーが受け継いだのは沈黙魔術及びウィルド・グラフの知識と天人種族の遺産の使い方と在り処である。

今アザリーが男の頭に押し付けた小箱もそのひとつで、対象の記憶

を失わせる力を持つ。以前持っていた転移の力を持った遺産と形は似通っているが、この遺産はそこまで強い力は持たない。精々数時間前の記憶が失われるくらいだ。

「これでいいんですか？」

「ええ。これでこいつは戦ったことすら覚えていないわ」

シヤマルに肯いて見せるが、この遺産の欠点としては、一定時間相手の頭に付けておかなくてはいけない事だ。だから気力・体力ともに疲弊させなければならない。

「じゃ、帰りましょうよ。もう眠くつてしょうがないわ」

「そうですねー・・・いや、ちよつと待ってください。シグナムから念話が・・・え!？」

「どうしたのよ？」

訝しがるアザリーをよそに、シヤマルは驚いた様子で念話でシグナムと会話している。会話を終えたシヤマルは厳しい表情でアザリーに告げた。

「アザリーさん、ヴィータちゃんが地球で管理局の魔導師と戦闘に入ったそうです」

「地球で？あそこには魔導師なんていないんじゃない？」

「そのはずなんですけど・・・」

彼女も戸惑っている様子だが、ヴィータが交戦しているのは事実のようで、1対複数で苦戦しているらしい。

「ともかく、見捨てるわけにはいかないし・・・シヤマル、戻るわよ」

「はいっ!」

第5話く再会（下）く（前書き）

久しぶりの投稿ですが、ちょっと短いです・・・
ああ、のんびりとした作品書きたい・・・

第5話く再会（下）

シャマルとともにヴィータを助けようと転移しようとした矢先、アザリーが持つ通信装置が懷の中で振動した。

「ちよつとまって、シャマル。メールだわ」

チャイルドマン教師からのメールを受け取り、シャマルに転送位置を指示して転移された先には、こちらを見て茫然と立ちすくむ黒髪の少年の姿があった。彼女にとっては5年ぶりに見る弟の姿は、最後に別れた時の弟とは違うあどけない、頼りない姿。

「アザ・・・リー・・・？」

「ハアイ。久しぶりね、キランシエロ。元気にしてた？」

2人の胸には、同じ想いが去来していた。それは『もう、会えないはずだったのに』という想い。

（いい目をしてる・・・『塔』の閉鎖的な世間から解き放たれて、色々な経験をしてきたのね）

義姉として弟の成長は感慨深いものがあつたが、今は敵対した者同士だ。

「アザリー、なんで・・・」

「私があんたの前に現れた理由は2つ」

キランシエロを無視して、アザリーは指を2本立てながら話し始めた。

「1つは『塔』の長老連中からの命令。^{エルダー}あんたの生存の確認・・・ま、これは今果たされたわね。そしてもう1つは・・・」

彼女の中指が折られた瞬間、キランシエロはハッと身構えた。感

じなれた雰囲気・・・アザリーの殺気だ。

「あんたの足止め、よっ！」

猫のようにしなやかな動きとともに、拳を作って突進して来る！とつさに両腕で拳をガードするが、骨に響く威力に顔をしかめる。続けて飛んできた足払いはバックステップでかわす。

「遅いわよ！キリランシェロ！」

「くうっ！」

さがった隙を逃さず、アザリーはさらにラッシュをかけてキリランシェロを追いこんでいく。キリランシェロはまともに拳を食らう事はないものの、防戦一方のままダメージだけが増えていく。

（でも・・・）

こちらの蹴りを防ぎ、繰り出された拳をいなしながらアザリーは胸中と思う。

（あんたも、変わらないわね）

最強の魔術士・最強の暗殺者と名高い師の後継者として目されながら、『飛べない小鳥』と言われる所以——それは『人を殺せない』暗殺者であるためだ・・・

「はあ・・・はあ・・・はあ」

（『これ以上すれば、殺してしまう』そう分かっているから、だからこの子は決定打が打てない・・・フォルテの言葉を借りれば『自ら止まってる』だったかしら）

ダメージが蓄積したせいとか、疲労困憊の体で肩で息をするキリランシェロを見据えてアザリーは呟く。

「キリランシェロ・・・王都で何があったか知らないけど、覚悟を決めないと自分の大事なものを何ひとつ守れないわよ」

「っ」

「それじゃあね、キリランシェロ。次に会う時までには覚悟、決めておきなさいよ。そうでないと——」

「すべてが手遅れになる・・・か」
力尽きて塀に寄り掛かったキラランシェロは、義姉が残した一言を
口の中で反芻した。ボンヤリと見上げた月は、優しく彼を照らすだ
けで何も答えてはくれなかった。

第5話く再会（下）く（後書き）

- ・ キリ君敗北の回でしたが、やっぱりアクションシーンは苦手です・

第6話　彼女を止める唯一の

時空管理局の戦艦『アースラ』のベッドに、なのはは横たわっていた。アースラに回収されたキラランシエロは、医務室のなのはのベッドのそばに座ってクロノから事の経緯を聞いていた。

「リンカーコアの蒐集？」

「ああ。僕たちが戦った相手というのは見当がついているんだが・・・」

彼のデバイスから、先ほどの戦闘の映像が映し出される。映し出されたのは桃色の髪をポニーテールにした長剣使いの長身の女性と、赤い髪を三つ編みにしたハンマー使いの少女、それに金髪を肩まで伸ばした女性に銀髪を短く刈った色黒の男性――の4人。

「彼らはロストログニア『闇の書』の『守護騎士』プログラム。闇の書とその主を守り、闇の書を完成させるべくリンカーコアを集める存在だ」

「それで、なのはは蒐集されてしまったってこと？」

「そうだ。でも、すべて奪われたわけじゃない。一時的に減少しただけだから、しばらく休めば大丈夫だろう」

なのはが目覚めるまで一緒にいてやってくれ。そう言い残してクロノは出て行った。

クロノが出て行ってから、しばらく沈黙が下りた。キラランシエロはしばらくなのはの頭を撫でていたが、不意に口を開いた。

「・・・なのは、クロノはもう出て行ったよ」

「・・・う、うん」

恐る恐る、といった様子でなのはがキリランシェロと顔を合わせる。彼女の瞳には涙が浮かんでいた。

「無事で、よかったよ」

この一言で涙腺が緩んだのか、なのはは泣きながらキリランシェロの胸で泣いた。その涙には色々な意味が込められているのだろう・・・悔しさ、怖さ・・・情けなさ。

「また、頑張ろうね」

頭を撫でながらのキリランシェロの声に、なのはは顔を彼に押し付けたままで肯いた。

「外は寒いだろうに、月を見上げて何を黄昏ているんだ？」

階下ではやとヴィータがワーキヤー騒いでいるのを背に、2個のマグカップを持ったシグナムが二階のベランダで佇むアザリーの隣に立った。湯気を立てるマグカップを1つ受け取ったアザリーに、シグナムは口を開いた。

「しかし、先ほどの戦闘は久しぶりに心が躍ったな。あの金髪の娘・・・テストロッサだったか。なかなか楽しませてくれそうだ」

「まったく・・・ヴィータがアンタを『戦闘狂』バトルマニアって言ってた訳がわかったわ」

瞳を輝かせながら先ほどの戦闘を振り返るシグナムに、アザリーは苦笑する。

「ところでお前は这个世界に来ていた弟と戦ったのだったな？彼の強さはわからないが・・・さすがにお前には敵わないか」

邂逅の時になし崩しに戦って以降、シグナムはアザリーの実力を高く評価しているようで、暇さえあれば模擬戦に誘ってくる。気紛れなアザリーはそれに対してその日の気分で戦ったり姿を消したりしている。2人の戦績は少しだけアザリーが優勢といったところか。

だからこそ、アザリーが告げた事実にはシグナムは戸惑いを隠せなかった。

「ねえ、シグナム。私を高く評価してくれるのはうれしいわ。でも、私とあの子が戦っても、私はあの子には絶対に勝てないのよ」

「何を言ってる……」

彼女らしくもない発言に、シグナムは一笑に付そうとしたが———できなかった。彼女の表情が、今までに見たこともないほど真剣なものだったから……

「あの子は——私の弟は、私を殺せる唯一の人間だから」

「なっ・・・」

息を呑むシグナムに、アザリーは告げる。

「私の弟は、キエサルヒマ大陸で2番目に人を殺すのが上手な男よ」

夜になり、電源が落ちたアースラの医務室。なのはが眠るベッドの隣のベッドで眠るキラランシェロは、舌打ちとともに体を起こした。
「・・・久しぶりに嫌な夢を見たな・・・」

夢に出てきたのは、王都でのこと。消火栓の名を持つあの男の言葉と義姉との敵対が、あの時の言葉を思い出させたのだろう。

「あんたの言う通りにはならないよ」

自らの手を見つめる。この手はアザリーを殺す手——ではない。

「僕はアザリーを殺せる唯一の人間なんかじゃない・・・アザリーを止めることができる唯一の人間なんだ」

第7話　遊園地へ行こう！（上）

海鳴市から少し離れた場所に、最近遊園地ができた。まだ開園して1年ほどだが、すでに周辺の市民には根付いているようで、休日ともなると家族連れや恋人同士、友達同士が訪れる。そして休日の今日も、近くの駅からの直通バスから遊びに来た大勢のお客が吐き出された。

そのお客の群れの最後尾に、黒い髪の10代半ばの少年と、彼の妹だろうか？10歳に手が届くか否かという金髪をツーテールにした少女の姿があった。

「ふー・・・ここが最近できた遊園地か。フェイトちゃんは遊園地って行ったことある？」

自らが手をつなぐ少女は、緊張した面持ちで自分を見上げてくる。

「い、いえ。私こういうところは初めてで・・・キラランシエロさんは？」

「僕の世界には『遊園地』なんてものすらなかったよ」

フェイトは固さが取れないまま、キラランシエロはそんな彼女に苦笑しながらゲートに向かって歩き出した。

そもそも2人がなぜ遊園地に来ているのかというところ——それは1週間ほど前にさかのぼる。

キラランシエロがアザリーに、なのはとフェイトが闇の書の守護騎士^{ツタ}に敗れた後・・・なのはのレイジングハートとフェイトのバルデイッシュは大破、修理の際に加えてなにやら『カートリッジシステム』なるものを組み込むらしく、2人は強制的に休養を余儀なくされた。そして、今回の話はキラランシエロとなのはが地球に居を構えたハラオウン親子のマンションを訪れたことから始まる。

「遊園地のチケット？」

「うん。新聞屋のお兄さんがくれたんだよ♪」

2枚のチケットを持ったエイミイが、うれしそうにそれを見せてくる。カラフルで派手なチケットには『ご優待券』とあり、説明書きを見ると1日フリーパスも兼ねているらしい。

「へえ〜。いいなあ、エイミイさん。私も1回しか行ったことないけど、すごく面白かったよ」

学校の遠足で行ったらしいなのはが、件の遊園地について語りだした。その時だった。

「ねえ、なのは」

今まで黙って話を聞いていたフェイトが、ちよいちよいと隣のなのはの服の袖を引っ張った。

「・・・遊園地って、楽しいの？」

フェイトはその生まれと育ち故、遊園地のような娯楽施設に行ったことがない。ゲームセンター、遊園地、カラオケボックス、ボウリング・・・それらの存在は知っていたが、行ったことはなかったのだ。

「そもそも遊園地って何？」

頭にクエスチョンマークを浮かべるのは、黒髪黒目、黒ずくめの我らが主人公・キラランシエロ。

彼の出身地・キエサルヒマ大陸には遊具施設の動力源となる電気すら広まっておらず、『遊園地』なる施設もなかったのだ。

「ダメ！ダメだよ、2人とも！遊園地に行ったことないなんて、人生の半分を損してる！」

エイミィはビシッ！とこちらに向けて指を突き付け、宣告した。

「2人にこのチケットをあげる！遊園地の楽しさを、その身を持って味わってきなさい！」

「そうなんですか・・・それはあの子たちにとってもいい経験になるでしょうね」

キリランシエロとフェイトが遊園地に着いた頃、高町桃子はハラオウン家を訪れ、リンディとお茶の時間を過ごしていた。

「はい、桃子さん。フェイトちゃんなんか、昨日は服をとつかえひつかえ私のところに持ってきて、『どれがいいかなあ・・・』なんて言ってきたんですよ」

「あらあら・・・ところでクロノ君とエイミィさんは？」

そういえば自分の娘は目の前の女性の娘とは正反対で、昨日からお冠だったと思い出す。そして居候の少年が今朝出て行ったあと、こっそりと彼の後をつけて行ったことも思い出した。

「うちの息子はエイミィに引っ張られて朝早くから出て行ったんですよ」

「あらあら、クロノ君はお尻に敷かれているみたいですね」

現在進行形で尻に敷かれている男、クロノ・ハラオウンは疲れていた。本当なら、久しぶりの休暇を満喫できるはず——の日。

「僕は・・・何をしているんだ？」

せっかくの休日に、遊園地の植え込みに潜んでいる現地協力者の少女と同僚を疲れた目で見つめている自分は何をしているんだろう、とクロノはため息をつく。

「ねー、ママー。あの人たち何してるのー？」

「しーっ、見ちゃいけません！」

子供連れのお母さんが不審者を見る目でこちらを睨み、我が子を強く引っ張って急ぎ足で3人の前を過ぎ去っていく。

（はぁ・・・平和を守る執務官であるはずの僕が、変質者扱いじゃないか。それもこれも——）

「む・・・」

今朝から不眠そうに頬を膨らませて、視線の先の黒髪の少年を睨みつける栗色のツインテールの少女と・・・

「うーん、2人の手と手が触れあいそうで触れ合わない、あの距離がもどかしいなあ♪」何が楽しいのかニコニコとビデオカメラを構える同僚。

——こいつらのせいだ！

キラランシェロとフェイトは園内の地図を見ながら、適当に決めたアトラクションに向けて歩を進める。さすがに休日とあってか、人は多い。

「わっ！ご、ごめんなさい！」

人が多く、フェイトが人にぶつかってしまったようだ。幸いにも悪い人ではなかったらしく、相手の人は何事もなかったかのように立ち去って行った。だが、このままでは人ごみに紛れて逸れてしまうかもしれない。

そう思い至ったキラランシエロは、やや強引にフェイトの手を掴んだ。

「えっ・・・？」

「ほら、フェイトちゃん。逸れたりとかしちやいけないからね？」

掴まれた手を不思議そうに見つめていたフェイトだが、「・・・はい」と返事をしてしっかりと彼の手を握り返した。

———今だけは、戦いの事を忘れて———

第8話　遊園地へ行こう！（下）

休日の遊園地は、活気にあふれている。

ジェットコースターで悲鳴をあげる人たち、メリーゴーランドで楽しげに笑う人たち、両親を笑顔で引っ張りまわす子供たちの笑い声・・・それを耳に入れながら、キラランシェロはベンチでぐったりとしていた。

「・・・絶叫マシンって、誰が開発したんだ？」

彼の連れが絶叫マシンにハマるということは、ある意味必然だったのかもしれない。彼の連れ——フェイトは高速接近戦を得意とする魔導師。戦闘時には高速で飛び回る彼女にとって絶叫マシンなんて慣れたものなのかもしれない。

しかし、だからと言ってド頭から絶叫マシンを全制覇させられるとはさすがに思わなかった。

「ただ今戻りました・・・キラランシェロさん、大丈夫ですか？」

ベンチにぐったりと座っているキラランシェロのもとに、フェイトが紙コップのジュースを両手に持って戻ってきた。それを受け取り、一気に流し込む。飲み終わって一つ息を吐くと、それを見ていたフェイトが申し訳なさそうに項垂れた。

「ごめんなさい・・・私、はしやぎすぎちゃって、キラランシェロさんに迷惑を・・・」

シュン、と落ち込んでしまったフェイト。思えば彼女は、いわゆる『普通の子供』とは異なる経験を歩んできた。そんな彼女が生まれて初めて来た遊園地、控えめな子だから表情にこそ出さなかったが、内心楽しんでいたに違いない。

「いや・・・前も言ったけど、僕も遊園地って初めてでね。少し気疲れしちゃっただけさ」

空になった紙コップをゴミ箱に放り投げて立ち上がり、彼女に手を差し出す。

「さあ、次はどこに行こうか？僕だって初めての遊園地だし、楽しみたいからね」

「・・・はい！」

差し出された彼の手を握って、フェイトは先導するように歩き出した。

続けて入ったお化け屋敷での2人の反応は、はっきり言って従業員泣かせであった。彼らが相対したのは百戦錬磨の暗殺技能者に戦闘技能を積んだ魔導師。仕掛けが作動する前にその気配に気が付いてしまい、全く驚いてくれないのだ。

「じゃあ、フェイト。次の角を曲がったら何が出てくるかを当てよう。僕は生首と見た」

「私は落ち武者だと思います」

挙句の果てには『次に何が出てくるか当てゲーム』をはじめだす始末。・・・ともかく2人は全く違う方向ではあるが楽しんでいた。いつの間にか、キリランシエロがフェイトを『ちゃん』付けしなくなったのも親しさが出てきた表れでもあったといえよう。

「・・・にやああああああ・・・」

「———あ！ちょっと———ちゃん、少し離れて———すけ！———官のくせにこーゆーのダメなの！？———」

「？フェイト、何か聞こえなかった？」

「え？私は特に何も・・・」

この遊園地のお化け屋敷は広さが日本一であるらしく、時折ほかのお客さんの声も聞こえることがある。何となくどこかで聞いたことのある声が反響して聞こえてきたが、同行者が気のせいだというの

だから気のせいなのだろう。

昼時を迎え、キリランシェロは食事のできるテラスの席に腰を下ろしていた。さすがに昼食時とあってか、家族連れや恋人同士が大勢席を陣取っていた。その中でひとり、ポツリと座るキリランシェロはひどく居辛かった。

それもそのはず、周りは甘い雰囲気を出している恋人同士や楽しそうに食事している家族連れ、笑い声が溢れている友達連れの席・・・少なくとも、席に一人だけなのはキリランシェロだけだった。キリランシェロに席を確保するよう頼んだフェイトは、慌てた様子でどこかに走り去っていったのだ。

（うわー、すごく居辛いんだけど・・・それにしてもフェイトはどこに行ったのかな？）

遊園地のあまり人気ひとけのない裏道に、2つの人影があった。一方は背が高く、もう一方は小さい。

「ごめんね、アルフ。わざわざ持ってきてくれて・・・」

「なーに、気にすることないさ。ご主人様の『初デート』の成功の為なら、あたしはたとえ火の中水の中！フェイトのもとに駆けつけるよ」

背の小さい方はフェイト、高い方は彼女の使い魔アルフ。アルフからバスケットを受け取ったフェイトは顔をトマトみたいに真っ赤に

染めた。

「も、もう！アルフ！キラランシェロさんとはそんなつもりで来たんじゃないってば！」

「それにしても今朝早起きして作って、そんな大きなバスケットに入れた『お昼ごはん』を忘れていくなんて、ね」

「アルフ〜！」

「あはは、早く戻ってやんなよ。アイツ腹空かせて待ってんじゃないの？」

アルフの指摘に『アッ』という表情を浮かべて、使い魔にお礼を言っ
て駆けていく主人。その後ろ姿を見送ったアルフはポツリとつぶやいた。

「・・・これがきっかけになって、フェイトにも普通の女の子としての経験が増えるといいねえ・・・」

「そう思わないかい、お三方？」

呟いたアルフの背後の植え込みから、ヒョコリと2つの頭が飛び出した。

「・・・気が付いていたのか」

「そりゃー、アルフなら気が付くでしょ。まあ、フェイトの可愛いシーンが撮れたから私的には満足だけど」

1つは仏頂面のクロノ。もう1つはビデオカメラを構えたエイミィで、こちらは満足げな笑みを浮かべている。

「なのはは？」

「はい」

クロノが猫の子を掴みあげるようにして持ち上げたのは――

「むーっ！むーっ！」

バインドで縛られ、猿轡を噛まされた我らがヒロイン・高町なのはであった。

「もう！クロノ君、酷いの！」

執務官が児童誘拐なの、とプンスカ怒るなのはに、クロノは人生に疲れたような重々しい溜息を吐く。

「なのは・・・頼むから、今日くらいはキリランシエロをフェイトに貸してやってくれないか？」

本人はあまり自覚していないが、なのはがキリランシエロに『年上の友人以上、師匠以上の感情を持っている』というのは、彼女を深く知る人たちの間では周知の事実である。知らないのは本人とキリランシエロ、そしてフェイトくらいである。

「・・・うん」

（なんだか胸がモヤモヤするの・・・フェイトちゃんもキリランシエロ君も私にとっては大事な友達。でも、2人が一緒に仲良くしていると――）

その感情の名が『嫉妬』だというのに、彼女が気が付くのは少しの時があるだろう。

戻ってきたフェイトが手に下げていたバスケット。その中身は少し不格好なサンドウィッチと同じく形の悪いおかずたちだった。形は悪かったが、その一品一品には彼女の一生懸命さが伝わってきていた。

「ご馳走様。フェイト、美味しかったよ」

「はい、お粗末さまでした」

朝からここまで過ごしてきて、少しは緊張の糸が解れたらしい。フェイトははにかんだ様な笑みを浮かべ「よかった・・・」と呟いた。「さあ、次はどこに行こうか？」

「それじゃあ・・・」

夕焼け色に照らされて、海鳴の街を歩くキラランシエロ。その歩みは時々停まって「よいしょ」と呟く。彼の背には穏やかな寝息を立てる少女の姿があった。

昼食をとったあと、緊張の糸が解れたフェイトは控えめな彼女なりに遊園地を楽しんでおり、それを見守る自分はまだか彼女の父親にでもなった気分になっていたと彼は自覚していた。

「さあて、もう少しで家だよ」

願わくば、自分の背で眠る彼女がいい夢を見てくださいように――

「今日はお疲れ様。どう？よかったらお茶でも」

「謹んで辞退させて頂きます」

ハラオウン家の住むマンションの前で待っていたリンディに眠っているフェイトを引き渡した彼は、そう言ってリンディ茶を辞退した。

「さーてと・・・僕を一日中尾行する元気があるみたいだから、今日は夜の訓練も充実させていこうかなあ」

——翌日が祝日で学校が休みだったことが『夜の充実した訓練』をみっちり受けて昼ごろまで屍のように眠っていたのはにとっては幸いしたのかもしれない・・・

第8話く遊園地へ行こう！（下）く（後書き）

作者は遊園地嫌いですので、今回の上下話はちよつときつかつたり・
・でも、フェイトメインのお話を一回書いてみたかったのでやっ
てみました。

まだ未完成のフェイトがヒロインのクロス作品がありますが、こち
らは多分日の目を見ることはない・・・かも。一応1話分は出来て
はいるんですけどね。

そういえば結構長く書いたな今回・・・

番外編く2人っきりの温泉旅！（上）く（前書き）

明けましておめでとうございます。

今回は番外編です。S t r i k e r s の I F 話だと思っていただけ
れば幸いです。

番外編く2人っきりの温泉旅！（上）

カランカラ〜ン！カランカラ〜ン！

商店街に間の抜けた鐘の音が響き渡った後、法被を纏った中年男性のだみ声が響き渡った。

「一等大当たり〜！温泉旅館1泊2日の旅をペアでプレゼントします〜す！」

転がり出てきた銀の球（金の球は特等。ハワイ旅行4泊5日の旅）に、高町家の母として夫と一男二女、そして居候の少年を支える高町桃子は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「はい、奥さん。これが優待券ね。旦那さんと一緒に行ってきたよ」「あら〜ありがとうございます〜♪」

2枚の優待券を受け取った桃子は、中年の男性——町内会長に礼を言い、お気に入りのお買い物の袋を提げて帰路についた。

（町内会長の言う通り、士郎さんに行くのもいいけど・・・たまには若い2人に譲るのも、ね♪）

「温泉？」

ミッドチルダから久しぶりに帰ってきた高町なのはは、ホットココアを飲みながら母の話に耳を傾けた。季節は冬ということもあり、温かいココアが彼女の心身を温めてくれる。

「うん。私も士郎さんもお店があるからいけないし、恭也君と忍さんは外国だし、美由希はしばらく留守にしているし・・・だからほら、ね？キリランシェロ君と行ってきたらどうかなって思うんだけど」「ミッドチルダを震撼させたJS事件が終結し、久しぶりの長期休暇。

愛娘も親友に預けて久しぶりの1人の時間を満喫していた。そこに降ってわいた温泉旅行の話。明日彼女を追って戻ってくる黒魔術士も戦後処理に駆り出されてへとへtoになって帰ってくるだろう。

「うん♪キリランシェロ君と行ってくるよ」

——久しぶりに、恋人と一緒に静かなひと時を過ごすのも悪くはないだろう。

電車に揺られながらの2人旅。線路の上を電車が走り、お馴染みの振動がシートに腰掛ける2人を揺らす。ローカル線の2両編成の車両に乗ったなのはとキリランシェロは、2人掛けの席に腰掛けていた。

車窓を眺めるなのはの隣からは穏やかな寝息が。恋人と2人きりの穏やかな空気と電車の心地よい揺れ、そして何より疲れていたのだろう……。事後処理が終わると、彼はすぐになのはのもとに来てくれたのだから。「愛されてるなあ、なのはちゃん」とニマニマ笑う親友の昨夜の言葉を思い出し、頬を赤らめる。さらに追い打ちをかけるのは駅まで見送りに来た義姉達（アザリーと忍）からこっさり渡されたある『モノ』だ。「確実に避妊はしてもらう事」「まだママになるには早いわよ」と渡された『ソレ』は、彼女のバッグの奥底にある。

（そ、そんなはしたないこと考えちゃダメでしょ、なのは！）
頬を赤くした自分を窘める意味を込めて、頬を叩いて気合をいれる。そして彼女の気合が入った直後、目的地の駅に着いたことを知らせるアナウンスが車内に流れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7018s/>

魔法少女リリカルなのはA's～不屈の心と鋼の後継～

2012年1月4日03時53分発行